

十四 次郎はわたし自身 そして だれだって

みんな次郎 『次郎物語』の作者 下村湖人 (二八八四〜一九五五)

『次郎物語』の主人公、次郎は、三人兄弟のまん中です。生まれてまもなくよその家にあずけられ、四歳の時、家にもどりましたが、兄や弟のように、家族にすなおにあまえることができませぬ。しかも、しつけの厳しい母親や祖母は、ぎょうぎの悪い次郎につらく当たります。ただ一人の心の支えは父親でしたが、仕事でめつたに帰ってきませぬ。そんな中でくらす次郎は、庭に出て意味なく木の芽をふみつぶしたり、学校に持って行く兄のカバンをこっそり便つぼの中にほうりこんだりして、やり場のないいたずらばかりしていました。上級生相手に大げんかすることもありました。

しかし、次郎はどうしようもないきかんぼうだったのでしょうか。そうではありませぬ。ある日、祖父が宝物にしていたそろばんで、こっそり遊んでいた弟が、うっかりそれを、こわしてしまいました。お母さんは兄弟三人をすわらせて、取り調べを始めます。次郎は、すぐに弟の様子がおかしいことに気づきます。そしてこう言うのでした。

「ぼくが、こわしたんだい。」

また、ある時は、気が弱い兄を助けて、いじめっ子とけんかして川に落ちた



映画『次郎物語』の一場面(©西友・学研・キネマ東京・荒木事務所)



下村湖人の生家(神埼郡千代田町崎村)

こともありました。きかんぼうだけど、本当は、心のまつすぐなやさしい子だったので。

この物語の作者が、下村湖人(本名、虎六郎とらろくろう)です。明治十七年(一八八四)、今の神埼郡千代田町崎村かんさきぐんちよだちようさきむらに生まれました。ゆつたりと流れる筑後川ちくご、葦あしのおいしげる川岸。そんなすばらしい自然しぜんにめぐまれたところで、湖人は、三人兄弟の真ん中まとして生まれました。しかし、すぐよその家にあずけられました。家にもどつても、しつけができていない湖人に、母親や祖母が、つらくあたりました。その次郎こそが、作者自身だったので。『次郎物語』に出てくるいたずらの数々は、湖人の経験けいけんそのものなのだそうです。

その後、湖人は、いたずら者のきかん坊ぼうから勉強にはげむ少年に成長しました。しかし、その間、家が破産はさんしたり、中学入試にゅうしに失敗しっぱいしたり、とてもつらいことがたくさんありました。しかし、湖人は、負けません。さらにがんばって見事に次の年、旧制佐賀中学校きゅうせいさがへ入学し、熊本の第五高等学校くまもと、そして、東京帝国大学へと進みました。

大学には、先生として後の大作家、夏目漱石なつめそうせきがいました。先ばいに、青年団せいねんだんのきそを作った田澤義鋪たざわよしほるもいました。湖人は、このようなすぐれた人物と出会あい、考え方を深め広げていきました。また、湖人は、中学のころから詩を作るのが大好きだいすで、すぐれた作品を次々に作りました。詩人北原白秋きたはらはくしゅうもその詩のすばらしさに感心したということです。卒業後、湖人は、東京で文学活



動を続けるつもりでいました。しかし、父が死に兄も病気になる、生活が苦しくなった家のめんどうを見るために、佐賀に帰らなければなりませんでした。明治四十二年（一九〇九）、佐賀中学校の英語の先生として、湖人の教師生活は始まりました。熱心で、しかも思いやりのある指導ぶり。どの学校でも「湖人先生は、こわいけれど正しいことをされる先生」と生徒たちや他の先生たちからしたわれました。唐津中学（今の佐賀県立唐津東高校）や鹿島中学（今の佐賀県立鹿島高校）の校長にもなり、生徒たちの教育に打ちこみました。唐津東高校や鹿島市立鹿島小学校では、湖人の作詞した校歌が、今でも歌われています。

昭和六年（一九三一）、旧制高校の学校長を最後に、湖人は、教師生活をしりぞきます。その後、先ばいの田澤義鋪とともに、青年教育に力を注ぎました。だれもが平等で、たがいに学び合おうという民主的な考えのすばらしい教育でしたが、そのころ日本は、大きな戦争に向かっているころでしたので残念ながら長く続けることはできませんでした。

そのころから『次郎物語』は、書き始められました。自分の生きてきた道をいつかは書こう。湖人はずっと前から考えていましたので、いったん、取りかかると、すわりづくめで、もくもくと書き続けました。ペンを持つ右の手首が、一回り大きくなつたほどです。

こうして、『次郎物語』は、出来上がったのでした。物語は、大ぜいの人々に読まれ、大評判となり、ラジオで放送されたり、映画化されたりもしました。

「兄ばかりかわいがられているみたいって、わたしも、ひがんだことがあります。」

「ついついいたずらばかりしてしまう次郎の気持ち、よくわかります。」

作者湖人のもとには次郎に共感きようかんした読者からの手紙がたくさんまいこみました。

その後、右手首の病気のため、医者からペンをにぎるのを禁止きんしされました。しかし、『次郎物語』の続編ぞくへんや田澤義鋪の伝記などを書き続けました。

きかん坊だった湖人は、主人公の次郎と同じように、どんなつらいことにも真正面から立ち向かい、こつこつと努力し続け、人生を切り開いていったのです。年老いても、人としての真実の道を追いつつ求め、気持ちを持ち続けました。

いつの時代も、子どもころは、多かれ少なかれ、だれだって次郎のような気持ちや経験があるのではないのでしょうか。「どうせ、わたしなんか……」ってひがんでしまうときや何かしら落ちこんだとき、ぜひ『次郎物語』を読んでごらんください。次郎が、きつとあなたをはげましてくれるはずですよ。